

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (31)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

今日、次々と新しい研究が発表されている。「研究会」と名の付く機関であれば萌芽性に富む新研究が連続的に出てくるのが望ましい。「井の中の蛙、大海を知らず」という言葉もあるが、われわれの Basic 研究も大海を知るために広く目を向けていたい。口頭の研究発表もよい。ただ、口頭によるものは対外的にも論文の形で残される必要がある。

公開の学会での研究会合であると外部から飛び入りで、その会合を密かに参観する人がある。そういう人の目的は必ずと言ってよいが、自らの研究上での論文書きの参考としての参観である。筆者自身、何らかのヒントを求め長年に渡り頻繁に中央の東京に出向き正会員ではない学会の会合をも密かに参観してきた。常に Basic の方法論とからめてのことである。特に若手の研究者の新しい仮説的な言語研究に関心を抱かされる。

ここでは「語に始まり語に終わる」究極の理論である C. K. Ogden の言語美学 (linguistic aesthetics) としての orthology (= the science of the right use of words) を意識した語釈を試みる連載である。Trump 氏のカジュアルな英文文体の筆者なりの査定と共に readability (可読性) と audibility (可聴性) の問題も視野に入れている。米国の R. Flesch や P. Kincaid などの readability の程度 (grade level) を測る分析研究が知られているが、それも参考としている。段落 Basic 文の readability と audibility、さらに一般の段落 English 文の場合を含めこれらの研究者の研究成果を基に思索を重ねている。

以前にすでに言ったが、本連載での趣旨は筆者が学部学生時代に注目したアメリカ構造主義言語学の祖 L. Bloomfield (1887-1949) の言語理論、さらにその後アメリカで大学院生として教室で歴史言語学 (historical linguistics) での演習用テキストであった文献 *The Origins and Development of the English Language* [Pyles, T. (1964)] (今も手元にある) に原点がある。本会用には月刊であるが他に目的があり、ほぼ週利用のペースで原稿書きしていたものである。今回の稿は No.31 であるが、実は Trump 氏の大統領退任当日 (2021 年 1 月 20 日) の演説文を No.99 で確認し、さらに次の No.100 を同年 1 月末の時点で脱稿している。ここでは本会 *Newsletter* 用に月 1 回、1 点の小出しとなっている。もちろん毎回、状況に応じ加筆・修正など微調整をしての提示である。

また、本連載は初回 (1) から毎回必ず知人の意味論系の専門研究者 (2 名) にも原稿を送信し (時に *Newsletter* 現物縮小版印刷コピーの郵送で)、フィードバックを取っている。Trump 劇場という特異な「意味劇場 (theater of meaning)」では 1 セオリー (theory) が示された [プラス α Basic 語 *theater* と Basic 語 **theory** は同系であることは前々回 (29) で言った] が、Trump 氏のアメリカ第一主義 (America First) をもじり、ここでは Basic 第一主義 (Basic First) で Basic 語を軸に音感と語感と意味の一体化の方法を示唆している。

元々、本連載は基本的に各 tweet 文末に記した日付直後に書き終えていたもので、ここでは後追いで Trump 氏が 4 年間の大統領在任中 (特に後半の約 2 年間) に用いた英語とその内容を見ている (前半 2 年間は彼の英語を何かと思索する期間としていた)。Trump 氏は常に 'America first' と共に、good / bad の 2 項対立 (binary opposition) の尺度 (measure) をもって男性的に豪快にモノを言い、良かれ悪しかれ、主張そのものは分か

りやすい。アメリカ人は強者を好む。彼の支持者の数は今なおアメリカで膨大である。

彼の特徴あるメディア英語文(journalistic English)には多くの研究者が注目し、アメリカの著名な英語言語学者で以前から筆者自身その著作を参考文献にしてきた G. Lakoff 氏もその1人であることをネット上で知ったことは本連載(10)の冒頭ですでに言った。日本でも目下、多くの研究者が資料を保管し、多角的に分析を試みている。

地理的に世界は広い。今回は大海の向こうのメキシコ国境、また中東のゴラン高原に目を向け 2019 年 3 月の時点で考え脱稿もしていた 2 例を提示する。

(1) I look forward to VETOING the just passed Democrat inspired Resolution which would OPEN BORDERS while increasing Crime, Drugs and Trafficking in our Country. I thank all of the Strong Republicans who voted to support Border Security and our desperately needed WALL! (March 14, 2019)

▲メキシコ国境の壁建設を巡り、Trump 大統領の出した国家非常事態宣言を、野党民主党に鼓舞された議会は無効だと決議した。米国内で犯罪、薬物、人身売買が増加しているなか国境を開くという決議に Trump 大統領は拒否権(veto)を発動すると言ひ、国境の安全対策には壁がどうしても必要とし与党共和党支持票に感謝している内容である。

事実、翌日には彼は議会のこの決議を拒否する文書に署名をした。議会はその後この拒否権を覆す再可決を求めたが、結果的には上下両院での 2/3 以上の賛成は得られなかった。

太線語 VETOING の veto [viːtu] (拒否権を発動する・拒否権)は[v]音をもつが、[b]音の bid (命令する)、forbid {for (=not) + bid} (禁止命令する)とも同系で、Basic 語 **bite** とも根元ではつながっているとみてよかろう。そうすると本連載(17)での確認となるが **bit, bitter, etc.**も同系で、すべて「噛みつき引き裂くこと」という語感となる。水を嚙んで進む **boat**、さらに un-Basic 語では噛みつく虫という考え方から **beetle** (カブトムシ)なども同系だと言った〔他の例は拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(38)参照〕。

文中の while ... -ing という「同時性」を示す言い方に習熟したい。<someone (is) doing one thing while doing another>という基本構造型から来ている。

また、文中の our desperately needed WALL の背景に文<we desperately need a WALL.>があるが、こういう語法の相関関係に慣れると表現力が豊かになる。こういう表現パターンを身体で覚えるには pattern practice で磨き上げる以外に方法はない。

また、音声面で今回改めて下線とした 1 音節語で末尾に[l]音をもつ wall であるが、こういう語の音声は意外に日本人の聴覚脳では処理しにくい。war と同じように時には聞こえたりもするだろう。短い 1 音節語が文脈中ではなく、特に単独に発音されると日本人の民族耳には明快には聴こえず、こもって聴こえ、いわゆる難聴状態となる。

語に強勢が置かれ発音されれば聞こえてくるわけであるが、問題は強勢のない弱音である。語強勢を好んで用いる Trump 前大統領で、ここでもまたも大文字化をする独特の正字法を用いている。彼の正字法(orthography)からも分かるが語強勢に絶対なる基準はないのであり、それを執拗に正しいものとして提示するとまたも混乱が起き危険となる。

1 音節語も He has a hat in his hand. と文脈で発話されると hat が聴けても、単独にそしてランダムに hat, had, hod, hut, hat, had, hut, hod, ... と連続的に発音されると、それが本物であればネイティブが明快に聴き分けられる音の違いも日本生まれの日本育ちの日本人には難しくなる。lid, rid, lead, lit, leat, rid, lid, leat, rid, ...、また flame,

frame, frame, flame, frame, flame, frame, ... などの1音節語の聴取も同様。マスクを掛けて発音された場合などは？自分で正しく発音できても、正しく聴けないのが現実。

英語は1音節語の多い言語のゆえ修得もままならない。日本人にとって音声から意味を理解する listening 以前に、意味は未知でもまずは音そのものを聴く hearing が問題なのであり、英語修得で最もままならないのがこの臨床的・聴覚的な hearing (聴き取り)となる。日本人が聴き取りのできるのは **sound** ではなく **voice** の抑揚の **intonation** だけである。英語音は日本語音のような声音ではなく、根本的に異質の「息音」であり、同一人の発する日本語音と英語音がまるで別人のように響くものがフェイクでない本物。

即座に反応が求められる英⇄日の通訳者(interpreter)やテレビでの生の即席英語インタビュー等での日本語字幕スーパー付けの転写士(transcriptionist)などは別にして、観衆のどよめきの中での野球などスポーツ実況生放送でのアナウンサーの発話の1音1音を捕らえ、真に英音に耳の開いている日本人はまるで皆無なのが実情。英語の **reading** は目を、**hearing** は耳を開くわけであるが、聴覚改造は一般の市販語学テープでは無理。

英音で日本人の耳によく聞こえないのは上記 **intonation** であるが、英音を如何に発するか調音音声学(articulatory phonetics)的な実践的教示は生粋の日本人の言語脳ではフェイクとなる。われわれ日本人がアメリカ生まれのアメリカ育ちのアメリカ人から日本語の音声や発音法の実践的教示を受ける？われわれのものが本物である。

彼らと日本人では英音は聞こえ方が違うのである。日本人の民族耳に「いかに響き、聞こえるか」という受動的で臨床脳科学的な聴覚音声学 (auditory phonetics)、さらに物理学的音響音声学(acoustic phonetics)的な研究成果が望まれる。日本音響研究所前所長・鈴木松美氏の物理学的・実験的な音声研究などは貴重である。西洋言語で日本人の民族聴覚に周波数(Hz)が合いチューニングしやすく、統語的な規則性もあり、最も手早く上手になれるのはスペイン語のはずで、呼吸法が楽なことも英語の比ではない。聴いて **repetition** (復唱) も **transcription** (書写) も共に楽で、英語は一旦リズムに乗ればよいが、乗れないと拍子抜けとなる。特に米語の呼吸法は飛沫の発散する割合も大で、米国などでの新型コロナウイルス感染者数もこれと無関係ではないはず(本連載 No.25 参照)。

英語とスペイン語の2言語が衝突もするメキシコ国境の壁であるが、<ABOUT>, <BECAUSE>, <PLEASE>の3つの深層意味素(deep sememes)で意味を確認してみる。

<ABOUT> : メキシコ国境の壁建設を巡り、私(大統領)の出した国家非常事態宣言を無効とした議会決議

<BECAUSE> : 犯罪、薬物、人身売買が増加していて壁はどうしても必要なもので、大統領として議会決議には「拒否権」(veto)を発動するつもりである。

<PLEASE> : 国境解放を主張する野党に鼓舞されてはだめで、国境閉鎖を支持してくれた共和党諸氏には私の感謝の気持ちを受けてもらいたい。

IT時代で連日大量の情報が流れているが、細かい情報は時とともに忘れ去られる。一般の人の記憶に残るのはせいぜいこの程度のものとなる。なお、この文の可読性(readability)、また発話されたと想定した場合の可聴性(audibility)はどうだろう？

(2) After 52 years it is time for the United States to fully recognize Israel's Sovereignty over the Golan Heights, which is of critical strategic and security importance to the State of Israel and Regional Stability ! (March 21, 2019)

▲52年前(1967年)の第三次中東戦争でイスラエルがシリアから大部分を奪い占領しているゴラン高原(the Golan Heights)は、イスラエルやこの地域の安定にとり戦略的に

も重要で、米国はイスラエルの主権を認める時だと Trump 氏が言った内容で、大いに注目に値する。読後の上記 repetition (復唱) と transcription (書写) にも好例である。

これは大統領再選へ向けたキリスト教右派福音派の支持層を意識した彼の狙いであった。その後、正式に主権を承認したが、国際法違反ともされ何かと波紋を呼びもした。



*(ゴラン高原は Israel, Jordan, Lebanon, Syria の4国と接しているところも戦略上で意味がある)

太線語 sovereignty (主権) と regional (地域の) は reign (支配・統治)、regal (威厳のある・王の)、foreign (外国の) などと同系で、印欧祖語の語根 PIE etymon の形態音素形は/REG/とされ、Basic 語では **regular, right** は同系ですべて g の文字をもっている。さらに実は Basic 語 **rule** も同系[他の多くの例は同上拙著、第二部、例(32)参照]。

太線語 strategic (戦略的な) は Basic 語 **straight, stretch, street, etc.** と同系で、初頭音[str]を「広げること」の意味と感知することは重要[同上拙著、第二部、例(97)参照]。

太線語 stability (安定) は PIE etymon の形態音素形/STA/に由来し原義が「立って動かないこと、じっとして立ちはだかっていること」で、[st]の音をもつ Basic 語 **stage, station, stem, system, store, distance, etc.**、プラス α Basic 語 *statistics*、形容詞のプラス α Basic 語 *stable*、un-Basic 語 *stay, stand, steady, status, steal, ecstasy, install, prostitute* (売春婦) 等々、きわめて多くの英語が誕生した[同上拙著、第二部、例(62)参照]。謎掛けなら「Basic 語 **stage** (舞台) と掛けて何と解く?」、「prostitute (売春婦) と解く」、「その心は?」→「子音群(consonant cluster)の[st]はじっとして、立ちはだかっていることの意味をもち、両者の root sense (原義) は同じ」ということになる。

文中の下線部 to fully recognize は split infinitive (分離不定詞) であるが、もう今日は特に journalistic English ではまったく一般的で、fully の位置はこれが自然となる。

本連載でどの文例も1語1語の慣用的語結合の方法を意識し、じっくり読み込むとよい。「文中で次々と連続する2語ずつはすべて慣用的なもの」と感じられればよいわけで、慣用的自然さが感じられなければ理解できないわけである。本会での研究目標からすれば合わせて、常に Basic ならどう言うかも意識しているとよいということになる。

自然に響く Basic 文も慣用性との絡みからであり、単に意味的自然さとは別である。真に自然な Basic 文は意味的ばかりでなく慣用的にも自然なもののはずだろう。これは外国人の日本語でも同じこと。彼らの日本語も自然に響くものは慣用的に自然であり、意味的にはそう言っても慣用的でなければ「そうは言わない」という点でやはり不自然である。structural linguistics (構造主義言語学) でいう言語の社会的 custom (慣習性)、もうこの言語理論の妥当性はあっさり認めてよい。

実は Basic も語彙制限のもと「そうは言わないが、そう言える英語」とは別に、「そう言う英語」への慣用性も求めたいのである。修得がきわめて難しいところは Basic の大きな欠点・盲点である。片手間にではなく、明けても暮れても専門に取り組んでいる必要がある。奥が深淵であるところがまさに Basic の奥義ということになる。